

図書案内

2022 年 10月号

担当 2-2 尾久 2-7毛利

学びにつながる歴史の本

段々と秋が深まってきました。今月は、読書の秋にちなんで歴史に関する本を取り上げます。歴史には、これまでに人類が築き上げてきた文化や生活、学問のすべてが詰まっています。1つの教科として捉えるのではなく、本を取って先人たちの教えや過去の経験を感じ取り、新しい学びを見つけるのも良いかもしれません。

『人物で読む平城京の歴史』／河合敦



今から千年以上前、奈良に政治の中心である平城京が置かれました。奈良時代は、遣唐使を派遣して大陸と交流をもち、日本に国際色豊かな文化をもたらしました。一方で国内では、権力をめぐって天皇や貴族、僧などが争いを続けており、なかなか政治が安定しない時代でもありました。80年という短い期間で、日本が一体どう変化したのかを詳しく知ることができる一冊です。(尾久)

奈良時代は、政治闘争がとても激しく、権力者の頻繁な交代劇があったことが、大きな特徴の一つだといえる。



神無月の由来



神無月の由来には諸説あるのですが、10月は全国八百万の神が一部の留守神様を残し、出雲大社へ会議に出かけていってしまうと考えられていました。その為、神様が出かけてしまう国では神様がいないので「神無月」、反対に出雲の国では神様がたくさんいるので「神在月」とよばれています。この説は、藤原の清輔の「奥義抄」の説なのですが、日本国語大事典では、俗説として紹介されている程度で、この辞典では神無月の「無」を「の」と解し、神の月つまり神祭りの月だとする説を採用しています。他にも10月は雷の鳴らなくなる月だから「雷なし月」を意味とする江戸時代の国学者の説、翌月に行われる新嘗祭の準備のため新米で酒を醸す（かもす）月、つまり「醸成月（かみなしづき）」を意味とする説などがあります。

<http://www.tokyo-jinjacho.or.jp/>



『ギリシア神話物語』／楠見千鶴子

ギリシア神話は、様々な神々が登場し、人間のように愛憎劇を繰り広げる物語です。実は人間に関する物語の方が割合が高く、それは実際に起きたことと想像力がよく調和しています。この本は、神話の内容と関わる様々な作品や遺跡の写真が収録されており、物語をイメージすることと、今に残っているものを知ることが容易です。様々な作品の元ネタに気付けるかも？(毛利)

ときすでに遅く、後に残ったのは希望だけ。



『一冊でわかるイギリス史』／小林照夫



イギリスは、複数の国から成り立っていて、その過程も複雑です。かつては世界の1/4を支配し、今もなお言語や文化の面で世界に影響をもっているイギリスは、どのようにしてその歩みをたどっていったのでしょうか。同じ島国である日本とは地理的・歴史的に似た部分があるので、様々な視点で読んでみるのも良いかもしれません。(尾久)

5000年近い年月をかけて、ようやく「イギリス」という1つにまとまった国家は、21世紀に入り大きな転機を迎えているのです。



『教養としてよむ世界の教典』／中村圭志



人の歴史とは切り離せない“宗教”の本です。この本の良いところは、様々な宗教の教典を概観し、それぞれの類似点や関係性が分かることです。宗教教典を信仰のためではなく、あくまでも「教養」「知識」として、宗教的思考から離れて理解していこうとするうえでオススメの本です。宗教を中立視点で眺め、それらを分析したり批判したりしながら見てみましょう。(毛利)

あらゆる宗教思想は、それ自体としては完結していない。
相互の批判が重要なのだ。